

2022/5/22

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑨

『ヨハネの黙示録 2 章後半』

■ 悪との戦い

「また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。」(黙示 2:12-13)

黙示録は、すべての時代の人に適応できるように、象徴で記されています。

「教会の御使い」は、クリスチャンを指します。ペルガモは、ローマ帝国のアジヤ州の首都で、ローマ皇帝を神とあがめる神殿があります。まさにサタンの王座と言える場所で、そこでイエス・キリストは悪と戦うということです。

皇帝礼拝をするような場所ですから、当時のペルガモは、クリスチャンに対して相当な迫害があり、殺される者もいました。しかし、それでもイエス・キリストに対する信仰を捨てることはなかったのです。つまり、私たちの戦いは、イエスの名を捨てないということです。クリスチャンであることを公表するのは恥ずかしいとか不利益を被るのではないかと思われる社会の中で、イエス・キリストを信じ続ける戦いです。これが神を第一とする生き方です。

私たちの社会の中にも「サタンの王座」つまり、人間を神とする王座があります。神社や仏閣などを拝むことはなくても、この世界には神を第一としないものが満ち溢れていて誘惑があります。それらを通して、「あなたは神を第一とするのか」と問われているのです。それが、私たちが戦わなくてはいけない中心です。

「しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行わせた。それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。」(黙示 2:14-16)

黙示録は、まず私たちのよくやった点を認めて受容し、それでも非難すべきことを教えるというパターンで書かれています。バラムとは、モーセの時代にイスラエルを滅ぼすために画策した人です。遊女と交わらせたり、偶像礼拝に導いたり……、それと同じことが今も、ニコライ派の人々によって行われていると言われていました。ニコライ派というのは、神の愛を肉的な愛に解釈する人々です。こうして人間の快楽を正当化させ、実際にその教えをよいものだと信じる人たちもいたわけですから、私たちは様々な誘惑によくよく気をつけなければなりません。

しかし、どんなに気をつけても、決意しても、私たちは誘惑に負けて罪を犯してしまうこともあります。そのようなときは、ただ「悔い改めなさい」と神は言われます。「悔い改める」とは、反省するという意味ではなく、「向きを変える」つまり「神のもとに行く」という意味です。

もし、私たちが罪を認めないのであれば、神はその罪を認めるように導かれます。私たちの内側から、そして御言葉をもって、罪を認めることができるように責め続けるのです。

私たちは皆罪人です。神から罪を指摘されて申し開きができる人など誰もいません。死がこの世界を支配している限り、どうしようもないことなのです。だから「神のもとに来なさい」と神は言われるのです。神は医者です。そして私たちは罪という病を抱えた病人です。神はどこまでも私たちがいやそうとなさいます。

■ 最大の奇跡

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」(黙示 2:17)

「勝利を得る」とは、神のもとに帰ることです。もし「悔い改める」という言葉を「反省する」という意味に誤解してしまうと、このことが理解できなくなってしまう。「隠れたマナ」とは、罪の赦しです。私たちが勝利に導く苦しみからの癒しになるのは、罪の赦しなのです。「白い石」は、当時の裁判で使われていた無罪のしるしです。裁判官は神の委託によって裁く権威を持っており、被告人が無罪の場合には白い石を渡して、その無罪を宣言しました。では、「新しい名」とはどういう意味でしょうか。悪魔が、私たちに見える安心を求めさせるようにした結果、人は見える姿を見て人の価値を判断するようになりました。見えるものでその価値を判断することが、サタンの誘惑・サタンの王座の中にあるということです。そこで、人は自分の行いの結果で、自分はダメなものかよいものかの判断を下し、それによって自分を苦しめています。しかし、それらはすべて過去の行為です。つまり、私たちは過

去の自分を見て自分を判断しているわけです。ということは、私たちを苦しめているのは、すべて過去です。私たちは過去にとらわれている囚人であり、苦しいことがあると、常に過去との因果関係を探ろうとし、前を向きたいと思っても過去に引っ張られて前を向くことができません。私たちが本当の自由を得るには、過去と決別しなければならないのです。それが、過去を白紙にする「白い石」です。神は、私のところに来るなら、私があなただを治療し、あなたの過去を消すと言っているのです。

つまり、神は私たちと過去を結びつけることをやめさせてくださいます。これが白い石を与えるということであり、神の勝利です。そして、過去と決別したことの証しが、新しい名なのです。あなたの名は過去から持ち込んだものであり、神があなただを新しく造り変えた今、神があなただに新しい名前を与える、これが、神の勝利であり、私たちに与えられた最大の奇跡なのです。

人は、奇跡というと、見える世界での驚くべきことや不思議なことを想像し、また、それを求めるものです。しかし、本当の奇跡はそうではありません。白い石を与えて、新しい名を持たせることなのです。私たちはもうそれを受け取っています。イエス・キリストを信じる者は誰もが奇跡を持っています。このことに気づかせることが、神が私たちに与える最大のマナであり、奇跡なのです。

神は私たちに、自分は赦され、神と和解させられ、神の子となり、過去が白紙になったことに気づかせ、私たちを将来に結びつけ、将来だけを見ることができるようになってくださいました。将来とは復活です。私たちを復活のキリストと結びつけ、希望を持たせるのが神の福音です。私たちが過去に目を向けるのをやめさせ、後ろのものを忘れてひたむきに前を見て進むことができるようにしたいと、神は願っておられるのです。聖書は、「古いものが過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなった」と語ります。私たちがその事実気づくなら、見えるものはたいした問題ではなくなります。なぜならもう神の最高の奇跡をいただいているからです。

放蕩息子のたとえ話が私たちにそのことを教えています。この話の最大のポイントは、放蕩息子のお兄さんです。兄は、見える祝福が神に愛されている証しだと考えていました。でも神が私たちに与えている最高の奇跡は、あなたはすべてを持っているということに気づくことです。あなたは新しく造られた者であり、私と一つであり、私の物はすべてあなたの物だという奇跡に、兄は気づきませんでした。これを不信仰といいます。放蕩息子の本当のテーマは不信仰と戦うことです。見える状況では気づきませんが、私たちはすべてを持っています。死からいのちに移され、永遠のいのちを持ち、すべての過去が赦されています。なのに、なぜいつまで後ろを振り向いて嘆くのかと、放蕩息子のたとえを通して神は呼びかけておられるのです。

聖書は、今私たちは鏡にぼんやり映る自分を見ているに過ぎないが、その時が来れば本当に私たちがイエス様と共に天に上って神の国に行ったとはっきりとわかると教えています。今は気づかなくても、私たちはすでに赦され、すでに持っていたというその事実、必ず気づく時が来ます。私たちは良きものであり、初めから神の子として造られていて、ダメなものではなかったことに気づくのです。このことに気づかせたいという願いがベルガモにあてた手紙のまとめです。

私たちが赦されていることを示したのが十字架です。私たちは十字架でこの世に対して死にました。この世は時間に支配されており、すべてが過去にしかありません。それが、決定づけられるのが、肉体の死です。肉体の死と同時に私たちの歩みはすべて過去になります。この世界には未来がないのです。だから、神は過去と決別させようとなさいます。それが未来を持たせるということです。過去と決別するには、過去を廃棄するしかありません、これが赦しです。「神の赦しを持ちなさい。そのことを理解するために罪を言い表してごらんください。私を見なさい。私のところに来なさい。」これが神の一貫したメッセージです。

■ テアテラ教会へ

「また、テアテラにある教会の御使いに書き送れ。『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神の子が言われる。』（黙示 2:18)

テアテラという町は、商業と工業の町でした。当時、商業にはユダヤ人が多く関わっていましたが、この町には多くのユダヤ人が入植していて、数多くの教会がありました。黙示録に記されている他の教会はどこも激しい迫害の中でしたが、その中でもテアテラは、比較的落ち着いた教会といえます。この教会にも注意すべきことが書き送られます。

燃える炎は、罪を滅ぼす焼き尽くす火の象徴です。「光輝く」とは、神の義のことで、黙示録1章に同じ表現があり、これはイエス様を表しています。つまり、神の子が罪を滅ぼし、神の義の勝利をもたらすという意味です。

「わたしは、あなたの行いとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近ごろの行いが初めの行いにまさっていることも知っている。しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行わせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。」（黙示 2:19-20)

神は、彼らがますます神に心を向け、奉仕に励んでいることを受け入れ、励ましておられます。そんなテアテラの教会の非難すべき点は、自称預言者の女が、信徒たちに間違った教えを広めるのをなすがままにさせているということです。これは、分派を指します。

確かに平和なところでは分派がよく起きます。啓示を受けたと言って、私こそ預言者だという人が現れたりするのです。私たちはそういう分派にも注意を払い、教会を挙げて戦わなければなりません。

「わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしない。見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。」

(黙示 2:21-22)

神が御手を差し伸べたにも関わらず、この女は戻ってきませんでした。不品行という行為から神に立ち返ろうとはしなかったというのが、正確な訳です。この女は神の治療を拒んだ結果、罪という病に投げ込まれました。分派というのは見える安心を求める行為です。見える安心を求めることは罪です。私たちもこの女にならって見える安心を求めるならば、大きな患難に襲われるでしょう。

罪と死は同じものです。死とは神との分離、すなわち神が見えなくなることです。神が見えないというのは不安です。この不安を取り除くために見える安心を求めること、これが罪という病気です。この世界に死が入ってきて、私たちは皆見える安心を求め続けるという病気になりました。この病気を放置しておく、争いが起きます。うわべを比べあうことによって、嫉妬や憎しみが生まれます。ここに苦しみが生まれます。また、見える安心を求めますから、少しでも領土を広げたい、富を得たいと思い、戦争が生まれます。戦争はすべて人が見える安心を優先させたために生じたものです。つまり、見える安心を求めれば求めただけ、患難に突入することになります。相手が自分の期待通りでないと、腹が立ち、争いが生じます。これが患難を生みます。

「また、わたしは、この女の子どもたちをも死病によって殺す。こうして全教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知るようになる。また、わたしは、あなたがたの行いに応じてひとりひとりに報いよう。」(黙示 2:23)

神を信じない者の最後は滅びです。ですから神は、私たちが患難の中に差し出すことによって、自分の中に眠っている罪を知るように導きます。私たちが苦しんでいるとき、神がその問題を静観して助けてくれないことがあります。それは、私たちが不安という自分の本

当の苦しみに気づき、見える安心にしがみついているから苦しいのだということに気づくまで私は待つと言っておられるのです。

私たちは自分の苦しみと向き合うことを通して、自分の本当の姿に気づくようになります。それは争いたいのではなく、愛したいという自分です。それなのに、したくないことをしているみじめな自分に気づくと、人は絶望するのです。その時、人は、本当の意味で神に助けを求めます。そして、神の赦しの治療を受けるようになるのです。こうしてあなたは赦され、過去と決別をし、希望を持つことができるようになるのです。

神こそが、人の本当の苦しみを明らかにし、癒す者であるということが象徴的に書かれています。神に喜ばれる善い行いとは、信仰です。それは、神の言葉を聞いて信じること、神のもとに来て治療を受けること、これが良い行いなのです。貧しい人にいくら施しをしても自分のいのちを差し出したとしても、愛がなければ何の役にも立たないと聖書は教えます。愛とは神を第一とすることです。神の言葉を受け取らなければ、未来はないのです。

「しかし、テアテラにいる人たちの中で、この教えを受け入れておらず、彼らの言うサタンの深いところをまだ知っていないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。また、彼に明けの明星を与えよう。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」(黙示録 2:24-29)

「サタンの深いところ」とは「死の深い不安」です。神は私たちにほかの苦しみを与えたりしません。罪を犯して苦しんでしまうことも、神を第一にできないこともあるけれど、永遠のいのちをしっかりと持つことが、神が私たちに求めていることです。永遠のいのちとは、イエス・キリストです。どんなに罪を犯そうとも、イエス・キリストから目を離さないようにしなさいと、神は言われます。神のわざを信じるとは、神の赦しを信じることです。

神のなされた最大の奇跡は赦しです。私たちは奇跡の中に生きているのです。神の目には過去から分離されていて、新しい名が与えられているのです。こうして私たちは神と友のような関係を築けるようになるのです。これを平安というのです。

諸国の民を支配する権威を与えるとは、神と一つになることです。つまり、私たちはもう神からの奇跡の中において、死からいのちに移され、永遠のいのちを持つ者となりました。私たちの過去は赦され、白紙になりました。だから、後ろを振り向かず、ただイエス・キリストを見上げて生きることを目指すよう、神が励まし続けておられるのです。

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」（ヘブル 12:2）

「それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるためです。ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」（Ⅱコリント 4:14-18）

あなたはすでに永遠のいのちを持っていて、内なる人は日々新しくなっているのだから、見えるものに目を留めるのではなく、見えないものに目を留め、そこにとどまりなさい。これが、神が最も私たちに伝えたいことです。あなたはもう過去と決別したから古いものは過ぎ去ったのです。

人の目には見えませんが、これが事実です。神が私たちに白い石を与え、新しい名を与えられた事実気づくこと、これが私たちの目指すべき方向であり、私たちが癒されて平安を得る道です。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（Ⅱコリント 5:17）